

こうしてクリスマスの当日に婚約をしたが、結婚式の日を決めるのに問題が起こった。アルフォンゾの両親は早くても四月まで待たなければ出国できないという。フランコ政権とアメリカ政府とのごたごたした関係が修復されたのは前年のことで、一家挙げてのアメリカ旅行は難しかったらしい。アンドレアが妊娠していることもあって、父親は年内に挙式することとし、三〇日に何人かのごく親しい友人と従業員だけを招いて、農場に新教の牧師さんにきてもらい、ささやかな式をあげた。アンドレアはパリで伯母からもらった首飾りをつけた。ああこのために買ってくれたのだと、伯母の「先見の明」に感心した。

アルフォンゾほど気配りのいい夫はこの世に珍しい。妊娠している妻をいたわることに全力をそそいだ。カトリックとして育てられた彼は新教の牧師によって結婚式を挙げるのに抵抗があったが、何一つ文句をいわなかった。いざ結婚すると、生来の好奇心にそそのかされ、新教とカトリックの相違点を見極めたくなり、アンドレアと一緒に教会に行くようになった。ノートルダム大聖堂でアンドレアは一種の宗教的体験を味わった。しかし宗教に関心をよせていたわけではなく、夫と一緒に教会に行くのは新しい経験だった。よそ目にも二人は睦ましい新婚夫婦だった。

つまり、あるいは不幸といったほうが正しいかも知れないが、がなかったわけではない。四月四日土曜日、父からの手紙がスタンフォードのアパートに届けられた。松本夫婦が強制収容を終えて日本に帰ったこと、いま山口県の室積という小さな漁村に住んでいること、などベンチュラの隣人の情報が詳細に書かれていた。タケちゃんは強制収容の束縛から逃れるために、そしてアメリカへの忠誠心を示すために、陸軍に志願し、第四四二連隊の一員となってイタリアやドイツで戦ったが、一九四四年一〇月三〇日に戦死した。第四四二連隊がドイツ軍に包囲されていたテキサス大隊の救助に派遣され、\*ボージュの森で待ち伏せていたドイツ軍と果敢に戦い、救助に成功した日のことだった。タケシ マツモト伍長は銀星賞を授与されている。松本夫婦は銀星賞をタケちゃんの思い出にアンドレアに差し上げたいといい、それを父が家に預かっている。未開封のタケちゃんからの手紙が添えてあった。

アンドレア、今僕は四方に鉄条網がめぐらされている強制収用所の中でこの手紙を書いている。今までここから出ることは一步も許されなかった。籠に入れられた鳥みたいだ。でも鳥が飼い主に愛されているのと比べると、僕たちの生活は実に惨めなものだ。アメリカ人として生まれ、アメリカ人として育った僕は敵性国人として、監視員から白い目でみられている。やけくそになることもあるが、僕は君とベンチュラの海辺で誓った約束を思い出しては、それを心の支えとしていた。明日入営する。一日でもいいから、籠を離れた鳥になりたい。自由に翼を伸ばしてみたい。ヨーロッパの戦場に送られ、見知らぬ所で戦死するかもしれないが、それでもいいのだ。僕は何よりも自由を望む。元気で帰って来る心算だよ。待ってくれない？戦争が終わったら是非とも君と結婚したい。永久に君を愛している。毅この手紙を読み終えたアンドレアの胸は乱れていた。やつとのことでタケちゃんのお知らせがわかったが、彼はもうこの世にいない。彼を心から愛し、彼の為に貞操

を守り続け、いずれは彼と結婚すると思っていながら、人違いをした人に処女を捧げ、そしてあたしは他人と結婚している。あたしには果たして人を愛する力があるのだろうか、と自責の念に責められた。

父の手紙は詳しく続く。松本夫婦が隣の農園に移ってきたのはタケちゃんが生れて間もない時で、その頃カリフォルニアには外国人土地法というのがある。国籍をもっていない移民が土地を所有するのは許されていなかった。松本さんは　この子はれっきとし

たアメリカ人、それでこの子が成人した時に、この農園がこの子に委譲される契約を結びましたよ　とほこらしげに父に初めて会った時に語ったそう。父は農園の持ち主リチャードさんとも知り合いで、そのことについて話したことがあるという。松本夫婦はよく働いた、そして毎年高い耕作料を払った。それが後に購入費として認められることを前提にしてのことだ。リチャードさんが四一年の夏亡くなり、跡継ぎのマックスは「そんな約束一切知らない」と言って松本夫婦を退去させようとしたが、父が立ち会って、それを取りやめさせた。太平洋戦争が始まり、日本人に退去命令がだされたあと、その農場を耕作する者はしばらくいなかった。マックスは耕作料滞納という難癖をつけて農場を再び手にいれた。非道なうちだった。それを止めようとして父が耕作料を代納すると言ったが、マックスは耳をかさない。松本夫婦の所在を探し回ったが、戦時機密を理由にして当局が協力してくれなかった。その一方で、松本夫婦は強制収用所に入れられて何もできなかった。戦後、穀という跡継ぎを失い、マックスと争う気力もなく、淋しく日本に帰って行ったのだ。隣の農園は今でも健全に経営されていない。土は生きているもの、持ち主や耕作者の愛情を反映して植えた物を穰らせる。マックスの土地が荒れているのは自業自得だよ、と父は自分を慰めるかのような口調で手紙を結んだ。